

P-3 防災ヘリでのペット吊り上げについての課題－災害を想定した訓練事例を通じて－

西村 裕子

千葉科学大学 動物危機管理教育研究センター

序文

災害大国日本における豪雨被害は毎年のように発生している。日本各地の大河川を管理する国土交通省によると「氾濫危険水位」を越えた大河川は、2015年には17河川だったものが2018年に62河川に増加し、これまでの河川堤防では決壊の恐れが高まっている。内閣府は「避難勧告等に関するガイドライン」を2019年3月に改定し「自らの命は自らが守る」意識を持ち自らの判断で避難行動をとる方針が示された。それに伴い5段階警戒レベルの防災情報に変わったが、建物の屋上に孤立し、自衛隊や航空防衛隊に救助される様子がニュースから消えることはない。

事例報告

埼玉県の動物指導センターから県認定災害支援団体である動物支援ナースに依頼があり、防災航空センターからは、隊員の命を守り市民の安全を確保するための訓練との説明を受け、参加を決めた。訓練へは、演者が飼養管理している重量約7kgの小型犬2匹健康体と動物看護師4名が参加。運輸安全委員会報告によると全国のヘリコプター事故は2010～2020年の10年間に63件発生し、そのうち吊り下げ輸送中における物件の落下は13件あった。一度でも事故が発生すれば、隊員はトラウマを抱え今後の救助活動に支障をきたすことも説明を受けた。ヘリコプターは、優れた飛行特性により垂直上昇、空中停止等を可能し遭難者の救助や災害時の資材の運搬等その利用価値はきわめて大きい一方で、固定翼機と異なり不安定な動特性を有し操縦が難しい。またホバリング中に発生するダウンウォッシュという風は、人が転倒し建物の屋根や壁の一部が破損する危険性がある20m/s以上の瞬間水平風速を観測するほどの強風で、実際の訓練時においても、周囲の枯れ草が竜巻のように舞い上がり、ヘルメットが何度も脱げ、立位を保つことがやっとだった。吊り上げの資機材は、大きさや素材が異なるペットケージをこちらが用意し並べそれを航空隊が選択。選んだキャリーを航空隊が平時から活用している容量95Lのポストンバッグに包み込み、2重構造の形で地上での引き上げ訓練が行われた後、屋外での本番を想定した訓練を行った。資機材が変わるだけでペットの動きが安定せず揺れることやジップ部分から飛び出すことに加え、ペットにとっての熱中症の危険や排泄、吊り上げ時の隊員への咬傷リスクなど課題が挙がった。また2匹のうち1匹は地上訓練の時点で資機材の中で暴れ吊り上げを断念した。

考察

ペットは子どもの数を越え、人とペットの共生は心理的健康を高める可能性があり、災害時飼い主とペットが離散することは、それが脅かされる危険を秘めている。防災航空センターも隊員を守りつつ、被災者を精神的に安定させ安全に引き上げるためには、ペットも一緒であることが必要と考えており、貴重な訓練機会になったとのことだった。しかし吊り上げには、災害時でなかったにも関わらず、隊員にとってもペットにとっても課題が多く、より安全な資機材の検討や中～大型犬、猫を想定した訓練も視野に入れる必要がある。そして何より建物に孤立する前に早期避難を促し、ペットと共に吊り上げ救助が行われるような状況を作らないことが重要である。